

＜青年期の吃音者が体験した悩みと、親に求めるソーシャル・サポートに関する研究 — 社交不安障害との関連 — >

研究年度 平成 30 年度

研究期間 平成 30 年度～平成 30 年度

研究代表者名 吉田恵理子

共同研究者名 永峯卓哉、菊池良和

I. はじめに

吃音症とは、繰り返し、引き延ばし、ブロックの3主徴を特徴とし、滑らかに話すことが妨げられる言語障害である。吃音者の40%以上が吃音によりコミュニケーションが妨げられ、社交不安障害（Social Anxiety Disorder：以下SAD）に陥ると報告されている^{1) 2)}。青年期（15歳～29歳ごろ）は、小学校から中学校、高校、大学、社会への移行、進路の選択と様々な発達課題があり、それがうまく達成できないと危機をもたらす。一方で、青年期は自律性が高まる時期でもあり、親は「何を、どこまでサポートしてよいのか」親役割や心理的距離についての悩みも抱く。しかし、青年期の吃音者が親にどのような支援を求めているかは明らかでない。そこで、青年期の吃音者が抱く悩みおよび社交不安、親に望む支援について明らかにし、当事者の声を反映させた基礎的資料に基づいた親によるソーシャル・サポートの試案を作成することを目的とする。なお、ここでいうソーシャル・サポートとは、HOUSE³⁾による4つのソーシャル・サポート（情緒的、評価的、情動的、手段的）とした。

II. 研究の参加者と方法

1. 研究参加者

機縁法により、吃音の症状を持ちながら生活している青年期（15歳から29歳）の人に研究参加を依頼し、調査の同意が得られた人とした。

2. 研究方法

データ収集期間は、平成 31 年 1 月から 3 月であった。データ収集方法は、吃音者は、過緊張により吃音症状が強まる傾向にあるため、事前に吃音者が参加する、吃音に関連した会やインフォーマルな場に参加し、顔見知りになったうえで研究依頼を行った。調査内容は、LSAS-J リーボヴィッツ社交不安尺度（日本語版）を使用し社交不安を測定した。LSAS-J は 24 項目で構成され、さまざまな社会状況について、恐怖や不安の程度と回避の程度を 0～3 の 4 段階で採点し、その合計点で評価する。また、親の支援に関しては、研究者が独自に作成した質問紙を使用した。親のサポートは、現在母親から受けているサポート、実施の有無にかかわらず吃音者が母親に望むサポート、現在父親から受けているサポート、実施の有無にかかわらず吃音者が父親に望むサポートの 4 種類とし、質問紙は、「話し終わるまでゆっくりまつ」「吃音についてオープンに話をする」など同一内容の 20 項目で構成され、各項目を「とてもそう思う」から

「全くそう思わない」の 1～5 の 5 段階で採点した。さらに、同意が得られた参加者に、「吃音を持つことによる嫌だったこと、困りごと、悩んだこと」、「親の支援で役に立ったこと」、「親の支援で役に立たなかった、または迷惑だったこと」「親に望むサポート」について、インタビューガイドを用いた半構造化面接を実施した。面接は、対象者の了解を得て IC レコーダに録音し、逐語録をデータとした。

3. 分析方法

1) 質問紙調査

関連については、スピアマンの順位相関係数を用いた。また多群間の差の検定は一元配置分散分析を用い、サポートの比較については、対応のある t 検定を用いて分析した。有意確率は 5%とした。なお分析には統計ソフト IBM SPSS Statistics24 を使用した。

2) 面接

悩みと、親に望むサポートそれぞれについて内容分析を行い、親に望むサポートは、抽出したカテゴリを HOUSE³⁾ による 4 つのソーシャル・サポートを参考に分類した。

Ⅲ. 倫理的配慮

研究目的・方法、協力の任意性および撤回の自由、研究協力に伴う負担並びに予測されるリスク・利益、個人情報取り扱い、研究成果の公表について説明した。また、研究終了後、研究資料は施錠できる書庫に 5 年間保管後レコーダの内容は削除し、逐語録にしたデータおよび紙面の分析結果はシュレッターで破棄することを合わせて説明し、書面にて同意を得た。18 歳未満の参加者に対しては保護者の同意も書面で得た。

Ⅳ. 結果

1. 質問紙調査

1) 研究参加者

研究参加者は、14 人（男性 11 人、女性 3 人）、平均年齢 20 歳（14 歳～28 歳）であった。吃音の症状は、いつもある 5 人、時々ある 8 人、どちらとも言えない 1 人であり、吃音があることによる日常生活での困りごとは、いつもある 2 人、時々ある 8 人、どちらとも言えない 3 人、ほとんどない 1 人であった。

2) LSAS-J リーボヴィッツ社交不安尺度（日本語版）

LSAS-J 調査票では、恐怖感/不安感の行為状況 15.14 点、社交状況 16.29 点、合計 31.43 点であり、回避の行為状況 9.36 点、社交状況 11.93 点、合計 21.29 点であった。LSAS 合計点は 52.71 点であった。LSAS の因子の点数と、吃音があることにより日常生活で困っていることがあるとは相関関係はなかった。

3) 親のサポートについて

(1) 母親のサポートについて：母親から現在受けているサポートは、「話し方よりも、話の内容に注目する」「吃音に関するあなたの努力や心がけを評価してくれる」「吃音に関するあなたの成果をねぎらってくれる」「話し終わるまでゆっくり待つ」であり、

「吃音の調子が悪い時には話しかけない」「吃音の調子を聴く」「ゆっくり」「落ち着いて」などの言葉をかける」はサポートを受けていない項目であった。

(2) 父親のサポートについて：父親から現在受けているサポートは、「話し方よりも、話の内容に注目する」「言おうとしていることを遮ったり、先取りしたりしない」「話し終わるまでゆっくり待つ」であり、「吃音の調子が悪い時には話しかけない」「吃音の調子を聴く」「学校・塾・アルバイト先・職場などに吃音のことを父親から伝える」「友達の親に吃音のことを父親から伝える」はサポートを受けていない項目であった。

(3) 母親と父親のサポートについて有意な差があった項目：母親と父親のサポートについて有意な差があった項目が 20 項目中 11 項目あり、青年期の吃音者は、すべてにおいて父親よりも母親のサポートを高く評価していた。

(4) 親に望むサポートについて：親に望むサポートは、現在受けているサポートと同じ項目が上位と下位にも挙がっていた。現在のサポートと望むサポートで有意な差があった項目は、母親には、「吃音がある人の会や親の会に参加する」「吃音の調子を聴く」の 2 項目、父親で 8 項目あった。

2. 面接調査（インタビュー）

青年期の吃音者が抱く悩み

1) 研究参加者

研究参加者は、12 人（男性 10 人、女性 2 人）であり、高校生 2 人、大学生 8 人、社会人 2 人であった。

2) 青年期の吃音者が抱く悩み

青年期の吃音者が抱く悩みは、【面接、電話、注文、自己紹介、発表など言葉によるコミュニケーションがうまくいかない】【吃音により能力が生かせないことへのもどかしさ】【周囲の無理解】【相手にどう思われているか不安】【予期不安を抱えながら行動せざるを得ない】【言いたくてもうまく言えないことによる悔しさ】【準備万端でも準備不足と思われ社会的評価が下がる】の 7 つのグループが形成された。一方で、「吃音による悩みはあるが、これまでに嫌な思いも含めて色んなチャレンジをする積み重ねの中で自分の中で少し自信が出てきたっていう感じ。」「悩んでも仕方がないって思えるようになって自分なりに対処しながらやってる」ことも語られた。

3) 親に望むサポート

青年期の吃音者のほとんどは、「心配をかけたくない」「この年になったら自分で解決していくしかない」と、親に相談することが少なくなった」と答えていた。その中でも、親に望むサポートは、12 のグループが形成された。それらを HOUSE³⁾ による 4 つのソーシャル・サポートを参考に分類した結果、①情緒的サポート：【吃音の症状に波があることを理解する】【必要なサポートについて子どもと話し合い子どもに合う支援をする】【親のほうから調子を尋ねる】【自分を飾らず本音が言える居場所である】【ちょっとした変化を分かってくれる】の 5 つ、②手段的サポート：【調子が悪いとき、本

当に困っているときに手を差し伸べる】の 1 つ、③情動的サポート：【吃音に対する役立つ正しい情報収集と理解】【吃音のことについて自分から知ろうと努力する】【資源の提供】の 3 つ、④評価的サポート：【理解してくれる】【頑張りや成長を認めてくれる】【任せて見守る】の 3 つに分類された。

V. 考察

青年期の吃音者の SAD に関しては、LSAS の因子の点数と、吃音があることで日常生活で困っていることがあるとは相関関係はなかったが、日常生活上での恐怖感や不安感を比較的強く感じていると考えられる。しかし、恐怖感や不安感を感じているわりにあまり回避せずに行きを行っていても明らかになった。これは、面接でも語られたように、「心配をかけたくない」「この年になったら自分で解決していくしかない」と、親に相談することが少なくなった」「これまでに嫌な思いも含めて色々なチャレンジをする積み重ねの中で自分の中で少し自信が出てきた」「悩んでも仕方がないって思えるようになって自分なりに対処しながらやってる」と、ハヴィガースト (Havighurst, R. J.) が青年期の特徴としている『親からの情緒的独立の達成』『社会的に責任のある行動への努力』『経済的に実行しうるキャリアへの準備』に向け、ただ不安に思うだけでなく、自らが解決しようとこれまでの経験も踏まえながら取り組んでいると考えられる。

このように、自立・自律にむけた段階にいる青年期の吃音者が親に望むサポートを HOUSE³⁾ による 4 つのソーシャル・サポートを参考に分類した結果、青年期の吃音者が親に求めるサポートは、直接的に何か手助けをするといった、『手段的サポート』よりも、理解してもらったり、自分を飾らず落ち着ける居場所であることなど、『情緒的サポート』であることが示唆された。また、【必要なサポートについて子どもと話し合い子どもに合う支援をする】というように、一方的な支援ではなく、青年期の吃音者を自律した個として認め、個別性を踏まえた関わりを当事者も含めて考えてほしいという思いがあると考えられる。

ソーシャル・サポートは間接的にストレス反応を低減させる効果がある。青年期の吃音者への支援も、当事者参加、情緒的サポートの視点を取り入れながら、取り組んでいく必要があると考える。

引用・参考文献

- 1) Blumgart E et al: Social anxiety disorder in adults who stutter. *Depress Anxiety* 27:687-692. 2010
- 2) 菊池良和, 梅崎敏郎, 澤津橋基広ら: 吃音症における社交不安障害の重症度 (LSAS-J) の検討: 耳鼻と臨床 63 (2), 41-46 頁, 2017
- 3) House, J. S. 1981 *Work stress social support and social support*. Reading, Mass.: Adison-Wesley.